上方 震下り 瓢磐鯰の化物 一名 難獣 といふ

安政二乙卯十月二日夜出行

須弥山の地底に大鯰住り変化て四足全躰をあらわし是を難獣と云一度首尾を動す時は泰山を役蒼海を干し宮殿楼閣堂塔伽藍大家庫倉を破損し辨らり火災をいださせるおびたゞしく其阿鼻声百千の雷も物かは南閻浮提をくつがへさんとおもふ世界の人民是が為に居ところを破られ財宝をうしなひ万歳楽〳〵と怖おそるゝ

廛爺佗に傷まり

全躰は［面］鯰のごとく口より火炎をふき身より水を出す事三十七ヶ所

［頭］土蔵の家根に似たり［背］脊中は瓦をならべたる如くまるで家根板の如きところもあり躰を震動する時は脊中の瓦八方へ飛散り粉の如し

あけらの両へさまそのゑつ［腹］のうちに亦は癒病といへる病ありておのが住家に居る時は身うちちゞこまりて自由をなさゞれ依て夕に外に出る時は往還に野宿せり

［足］は四本の柱に似てゆら〳〵として一向に役にたゝず常に尤本を杖の如くにしてからだをよう〳〵建ている

［尾］は大浪のおこるがごとく此尾にさはる者は共に巻込まれて地ごくへ店替をなす土左衛門と名を改むるなり此尾を障泥とよぶ恐べき難獣なり

○抑此獣ものは神代の昔世豊秋津洲に蟠まりて時々出て人民をなやましけるを天下泰平のため皇太神鹿島の神に神詔ありて石の御坐 俗に要石をもつて其頭をおさへ動かしめず依て此難獣の△

△恵ひなく ゆらがね代と 万歳楽をとなへけり

さりども諸神の居まさぬをりは僅にその身を動すとも諸人万才楽と祝ふまでその難をのがるゝとや然るに此変化時を得て今年十月八百万の神達出雲に御幸させ給ひし間を窺ひ地中に動揺して三千六百の町々家蔵を破損せること夥しく世界をくつがへさんと思ひけれ共此留守居の蛭子尊によりて出雲国へ火急の御告に皇太神の御指揮として鹿島の神宮要山の次第頃只一時にお帰座ましまし此難獣をおさへたるかんぜん要の礎に世々盤石の如くなりけり

出雲國大社にあつまりて八百万神蘒藉を怒りなふ

あつてはならぬ騒動でハ地震あるいは大焼けで六動 雷ゆり兵ハあらゆるのがで そんな南京において元禄年中に難にあひましたる鯰の化物天災 とりも獣けのでムり升 甚怒せん まづ〳〵 難泥をあらた土蔵の友聞もおもひ だんぢや〳〵

鯰の化物
安政二乙卯十月二日
一名 難獣 といふ
鹿島太神宮
天氣秘
要石

鹿島大神宮

鹿島大神宮